よろずは

一月号平成二七年

「記紀万葉の故地」シリーズでは、記紀万葉に記された地

記紀万葉の故地 10

域にかかわる内容をご紹介していきます。

いを真っすぐに進み、加太まで至ります。の駅路と呼ばれる道でもありました。駅路は、このまま紀ノ川沿や背ノ山付近を通って西に向かいます。この道は、古代の南海道古代の紀路は、都から紀伊国に入ると、紀ノ川沿いの真土山

鶴の飛ぶのが見える。(巻第七の一一九九番歌)(訳文)藻を採る舟が沖を漕いで来るらしい。妹が島の形見の浦に薬刈舟沖漕ぎ来らし妹が島・形見の浦に鶴翔る見ゆ

ているようです。さりに来る習性があるからで、海藻を集める舟の動きと連動させ比定されています。五句目に鶴が出てくるのは、干潟にエサをあ、四句目の「形見の浦」が加太付近の浦に、「妹が島」が友ヶ島に

ヶ島を伝いながら、船で淡路島へと向かいます。は、駅路であったことが大きな理由でしょう。駅路は、ここから友ー今なお景勝地として知られる加太ですが、この歌が詠まれたの

であることも忘れてはなりません。【万葉古代学係】 最近は、戦争遺跡で注目されていますが、古代の重要な故

地

を訓読みしたものです。タイトルの「よろずは」は、「万葉



城ヶ崎からの眺望 左に友ヶ島(地島)、その奥に淡路島が見えている。